

# All About SAFETY

安全をいかに創造するか

「安全である」ということは、すべての業界において共通の目標といえるでしょう。「All About SAFETY」は、様々な業界や企業がどのように安全を追求しているか、その考え方や具体的な取り組みを紹介し、皆様の安全活動の参考としていただくための記事です。

## ヤマト運輸(株)の取り組み 社会的インフラを担う セールスドライバーへの安全運転教育

人命の尊重を最優先すべく、  
「安全第一、営業第二」の理念を徹底

ヤマト運輸(株)(本社:東京都中央区・以下、ヤマト運輸)は1919年に創業。1929年に日本で初めての路線事業として、定期積み合わせ輸送を開始。その後1976年に、不特定多数の人々の配送ニーズに応える「宅急便」を生み出した。「宅急便」をはじめとする同社のサービスは社会的インフラとなり、今や人々の生活に欠かせないものとなっている。こうしたサービスを支えるのは約6万人のセールスドライバー(以下、ドライバー)だ。同社コーポレート安全部 交通安全課長 植田順一さんは「当社は『人命の尊重と安全の確保』を掲げ、業務上のいかなる時も人命の尊重を最優先すべく、『安全第一、営業第二』の理念を徹底しています。この理念を具現化するため、私たちはドライバーの交通事故や労災事故の未然防止に日々取り組んでいます」と話す。ヤマト運輸の安全施策の基盤となるのは、「安全指導長制度」である。「安全指導長とは安全対策の専門職で358名(2023年3月末現在)います。当社が定めた検定を通過した者だけが安全指導長に任命されます。全国80カ所にある主管支店で、日々、管下の営業所を巡回し、実際にドライバーの隣に同乗してアドバイスをを行うなど、きめ細かい指導をしています。厳しい適性検査により採用されたドライバーは、入社後約1カ月にわたる安全教育などの入社時研修を受け、社内免許を取得した後、初めて実際の乗務につくことができる。その後も、入社1年後研修、安全指導長や運行管理者による定期的な添乗指導・路上パトロール、3年に1回の運転適性診断などを通して、安全運転意識を高めていく。

### ドライブレコーダーとデジタルタコグラフを 一体化した車載端末を全集配車両に搭載

ヤマト運輸の集配車両には、ドライブレコーダーとデジタルタコグラフ※を一体化した通信機能搭載の車載端末「Neco-Assi」が搭載されている。ヒヤリハットが起きた場合は映像が自動的に記録されると同時に、ヒヤリ

ハット体験箇所として地図上にも登録され、通過時に注意喚起がアナウンスされる。

「『Neco-Assi』によって、これまで難しかった運転の可視化が可能になりました。運転(車両の挙動)が数値化されるだけでなく、車内外に設置したドライブレコーダーによって、運転している様子も確認できるようになったからです。車両の挙動を表す数値によって、急減速など“急”のつく動きがあれば、その時にどのような運転をしていたか、映像で振り返ることができます。さらに、本人が気づきにくい運転のクセなどドライバーの課題を把握し、改善へ導くアドバイスがしやすくなりました」。

具体的には、安全指導長が「Neco-Assi」から収集したデータと映像をもとに、ドライバー一人ひとりの運転を診断。その診断結果をもとに、ドライバーと1対1の面談方式で指導している。

「自分の運転映像を客観的に見てもらいながら、車両の挙動を表す数値的なデータを示し、今後どのように運転するべきかを話し合うことで、行動変容を促しています。リスクが高い運転をしていると診断されたドライバーについては、面談の事後に運転が変化しているか安全指導長が確認しています。ドライバーの運転を継続的にモニタリングし、その状況に合わせて指導することもできるのです。映像を活用した教育ヘシフトしたことでドライバーの安全運転意識も高まり、交通事故、とりわけ人に被害を与えるような事故は減少傾向にあると、植田さんは「Neco-Assi」導入の効果を語った。

### 全国のドライバーが安全運転の 技術や知識を競い合う

ヤマト運輸ではドライバーの安全運転意識や運転技能の向上を目的として、全国安全大会を2012年から開催している。新型コロナウイルス感染症拡大により2020年から2022年まで中止となったが、2023年は10月15日と16日に中部トラック総合研修センター(愛知県みよし市)で第10回全国安全大会が4年ぶりに行われた。予選を経て営業所の代表となったドライバーは主管支店の予選



2023年に開催された第10回全国安全大会には36名のドライバーが出場



ヤマト運輸(株)コーポレート安全部 交通安全課長 植田順一さん

に出場。主管支店の予選を通過した後、全国10地域の予選を勝ち抜いたドライバーだけが全国安全大会へ出場することができる。第10回全国安全大会に出場したのは36名(グループ会社含む)。約6万人のドライバーの中から選ばれた精鋭たちである。

「全国安全大会は模範的なドライバーを讃えるとともに、出場者を選出する過程で、集配業務の第一線を担う営業所の安全運転意識の底上げを目的としています。営業所の予選においても、競技種目は全国安全大会に準じて行われます。点検や運転の正確性とスピードを磨こうという動き自体が底上げにつながると考えています。当社にとって、安全の裾野を拡げるためのたいへん重要なイベントです。昨年は4年ぶりということもあって、大いに盛り上がりました。今年も全国各地で予選が始まっています」と植田さんはいふ。競技は「入社2年未満」「小型車(2トン)」「中型(4トン)／大型(10トン)車」の3部門に分かれ、「学科試験(法令)」「日常点検整備」「運転実技」「運轉行動評価」で審査する。「競技種目のうち『運轉行動評価』は第10回大会から新たに加えました。ドライブレコーダーを活用し、大会当日の運転だけでなく日常の運転も審査対象にしようというものです。出場者のドライブレコーダーの映像から、ある一定の条件に当てはまる場面を選び、その時の運転操作や安全確認の様子を評価しました」。また、一定期間、無事故を続けるドライバーを永年無事故運転者として毎年、表彰している。無事故年数(または距離)に応じてダイヤモンド賞、金賞、銀賞などが授与される。

### 様々なツールを通じて ドライバーへ安全情報を提供

各ドライバーには入社時に「今日からシリーズ」というマニュアルが配付される。運転か



3回ある予選を勝ち抜いたドライバーたちが安全運転の技術を競い合った

ら接客対応にいたるまで、ドライバーの心構えやあるべき姿が示されており、この「今日からシリーズ」に基づいて、ドライバーは業務を遂行している。

ヤマト運輸では、社内で安全に関する情報共有ができるツールの作成にも力を入れている。全営業所で掲示されている「安全カレンダー」(写真参照)はその一つ。これは毎月のカレンダーの上に危険予測トレーニング(KYT)のイラストを配置し、その裏面に解答と解説を記載している。職場内で気軽にKYTを実践してもらうためのものだ。

「月ごとにテーマを設定し、交通安全だけでなく労働安全に関するテーマもあります。毎月『安全強調日』を1日設定しているの、その日は月のテーマを特に意識して運転や作業に取り組むことになっています。さらに、ドライバーとのコミュニケーションツールとして安全情報誌「セーフティ・ファースト」(社員向け)を毎月発行している。直近の号では、今年4月から中大型トラックの高速道路での最高速度の引き上げや、改善基準告示(自動車運転者の労働時間等の改善のための基準)改正のポイントについて取り上げた。このほか、交通事故や労災事故の事例を紹介し、再発防止のための注意を喚起している。「めざすべきは、交通事故を発生させないことです。そのために、プロドライバーとして、地域の模範になる運転ができるドライバーを育てていきたいと考えています。教育体系の整備はもちろん、ドライバーをマネジメントする仕組みや、運転を可視化するシステムのアップデートに今後も取り組んでいくつもりです」。

※自動車の走行時間や走行速度などの運行記録を自動的に記録するシステム。



管下の営業所を巡回し、添乗指導を行う安全指導長

### ●永年無事故表彰基準と2024年の受賞者数

| 賞            | 無事故年数または距離   | 受賞者数(2024年) |
|--------------|--------------|-------------|
| ダイヤモンド賞      | 25年または270万km | 709名        |
| 金賞           | 18年または190万km | 1488名       |
| 銀賞           | 6年または80万km   | 2268名       |
| 銅賞           | 5年または50万km   | 4872名       |
| セーフティ・ドライバー賞 | 2年または20万km   | 2023名       |



「安全カレンダー」の表面(左)には危険予測トレーニングのイラストが描かれ、裏面(右)には解答と解説が記載されている